九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

陳龍正の思想 : 東林学の一継承形態

荒木, 見悟
九州大学文学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/18032

出版情報：中国哲学論集. 1, pp.1-16, 1975-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

陳龍正の思想

―東林学の一継承形態―

荒木見悟

一、龍正をめぐる人びと

陳龍正（一五八五―一六四五）は、万暦十三年六月、于王（字伯褒　号穎亭）の第二子として、嘉善の胥山郷に生まれた[1]。かなり広汎な土地を所有する名家であったようであるが、于王に至り、始めて進士に及第し（万暦十四年）、いわゆる官僚地主としての地歩を固めることとなる。龍正の記した「困学説」（全書巻二十一）によれば、彼は十一、二歳の頃、仙仏にあこがれて、長生を求めたり僧侶になろうとしたために、ひどく父を落胆させ、十四歳の頃は、時芸詩文に熱中し、二十六、七の頃は経済に志したという。しかし三十歳の時、父を亡い、ついで母に死別し、境遇が苦しくなるとともに、漸く本格的な学問に志すに至るのである。この頃から龍正が師事し始めるのは、呉蘧菴（諱志遠）・高忠憲（諱攀龍）・帰陶菴（諱季思）の三人であって、この中思想家として特に著名なのは、高忠憲であるが、この三人は相互に親交があった。

元来、陶菴は、明代古文家の領袖と言われる帰震川の児であって、その略伝は、高忠憲の「陶菴先生伝」（高子遺書巻十）に見ることができる。その中に、次のような一節がある。

「（陶菴は）乙未（万暦二十三年）、京邸に従い、嘉善の呉子志遠に交わり、錫山に過り、高子攀龍に交わる。三人相得て歓すること甚だし。時に高子は室を蠡湖の上に築き、水居という。呉子は室を祥蕩の上に築き、荻秋という。帰子は既に三たび公車に対すれども第せず、又両たび婦を喪い、羸疾を得、室を崑の西邨に築き、陶菴という。三子は、たがいに過従し湖山を几席とし、風月を衣被とし、図史を飲食とす。見る者、三人の一室に相対し、終日黙然として自ら怡ぶを以て、その事とする所を知らざるなり。」

「高忠憲年譜」によれば、高子が呉・帰二子とこうした清雅静穏な交際をあたためた時期は、万暦二十六年（時に

忠憲は三十七歳）より二十八年にかけてのことであるが、[2]先に万暦二十年「崇正学闢異説疏」において「孔子の道は、程朱に至って闡明すること殆んど尽せり。孔子を学ぶには、必ず程朱によること、正に室に入るには、必ず戸によるが如し」と断定してはいるものの、型通りの朱子学にはまり込んでいたわけではなく、大悟を得るまでには、なお友人知己との切瑳を重ね、黙坐澄心の体験を積まねばならなかった。（高子遺書巻三、困学記参照）有名な「復七記」は、右の水居居住中に作られるのであるが、後年、龍正がこの記に加えた後跋の中に、次のような一節がある。

「（禅宗は）終日終年、無理の話に参ず。真にこれ労して功なきなり。故に程子は、『天下に禅客より忙しきはなし』という。先生（忠憲）はその意を反してこれを用い、人をして且く静中において聖賢の切要の言を体帖せしむ。百世の群蒙を開くというべし。」

ここに忠憲の主静尊重に対する、龍正の共感が示されているわけであるが、この両者の関係については、次章で取り上げることとし、今は、先にあげた帰陶菴もまた、茅屋に琴一張・書数百巻をたくわえて、他に長物なく、「琴を鼓し書を読み、晏坐黙識して、天地の垠なきを窮め、品物の自あるを察する」生活を送り、龍正から「陶菴の人と文とに至っては、又塵埃中の一氷壺秋月なり」（全書巻四十五、与金正希侍御）と評されるタイプの人であったことを注意するにとどめる。この三人に共通する黙坐澄心の工夫の内容が、果して厳密な意味で同一のものであったか否かは詳かでないが、そこに時流を透視しつつ、既成の思想類型にこだわらず、自己定立をはかろうとする意図がこめられていたことは、ほぼ間違いあるまい。それは具体的現実からの逃避というよりも、一応そこに一定の距離をおき、主客両界にわたる諸問題を冷静に凝視し、そこに本心の満足し得る定点を確立しようとしたものであろう。[3]従ってそれは単なる朱子学の追認としての静坐ではなく、朱子学の修正改変をもいとわぬ静坐であったはずである。さればこそ清初の朱子学者陸稼書は、高忠憲を攻めて、次のように言う。

「蓋し静坐を以て主となさんと欲せば、則ち凡そ先儒（朱子）の致知窮理存心養性の法、これがために変易せざるを得ず。それ静坐の説は、程朱と雖もこれあるも、学者をして、動静ともごも養い、頃刻も離るることなからしめんと欲するに過ぎざるのみ。高子の困学記中に言う所の如く、必ず澄神黙坐し、面目を呈露して、然るのち以て下手の地となすあらしめんと欲するにはあらざるなり。」（三魚堂文集巻二、学術弁中）

いわゆる定型的朱子学における主静と、高子らのそれとが、質的に相異する面をもっていたことに注目する必要があるのである。この点から顧る時、龍正が少年時代より二十余年にわたる迂余曲折を経て、漸く主静をかかげるこの一群の人びとに触発の契機を見出したことの意味が、了解されて来るのである。(4)

次に龍正は、魏大中と同学であるが、彼が東林党の一人として、魏忠賢に逆らい、天啓五年七月、ついに獄中で憤死したことは、高忠憲の自殺及び周宗建の入獄（宗建は龍正の仲弟の外舅にあたる）とともに、朋党というものの利弊について、深刻な反省をもたらす端緒となった。

龍正はまた外舅丁氏の因縁で、その一族丁賓（名札原）より経史の手ほどきを受けたと言われる。(5) 丁賓は、王龍溪の門をくぐり、現に『王龍溪集』発刻者の中に名を列ねているのであるが、彼がどれだけ左派王学の思想に浸っていたかは疑わしい。『王龍溪集』（巻十五）には、「冊付丁賓収受後語」なる一文を収めるが、そこには、

「礼原、資性敦茂にして、少年にして利を発す。即ち古道に志あるも、あえて俗套を以て自ら埋没せず。良知の説を聞くに及び、志ますます自ら励み、学を為むる所以の方を求む」

とあり、俗套にはあきたらなかったものの、過激な良知受容者ではなかったことを思わせる。ただ龍正がこの人を通して、良知説や陽明の学徳を知る機会を得たであろうことは疑うべくもない。

その他、龍正の知己の中で、特に著名な人物として、劉念台がいたことを指摘しておこう。魏大中が獄死した時、念台は西向再拝して哭し、祭文をささげてその死をいたんだ。（劉子全書巻二十三所収）もともと念台は、高忠憲と学問的交流があったが、そうしたルートから、龍正と念台との交渉が生じたのであろう。龍正の眼に、念台の人物像は、どのように映じていたであろうか。

「念台翁は、魏忠節の題主たり。江を渉りて遠く来る。細かにその人を察するに、真品真学、心を世道人心に留む。末だ高師（忠憲）の広大精微なるには及ばずと雖も、清勁中、またすこぶる円転の機・含容の度あり。断々乎として絶佳なる掌院なり。」（全書巻四十三、復曹峨雪編修）

ここに念台の学を忠憲に及ばずとするのは、龍正なりの評価であるが、「円転の機・含容の度あり」というのは、念台思想の核心に時局収攬の能力ありと認めるものであろうか。しかし忠憲思想の忠実な祖述者である龍正と、忠憲

思想よりも動的傾向を強め、ついに独自の誠意説にまで到達した念台とでは、当然あるへだたりが生まれて来ざるを得ない。両者の論争を示す詳細な資料は残っていないようであるが、崇禎九年、龍正が念台に送った返書から、多少の手がかりをつかむことができる。

「台諭、この中、なお沾帯ありとす。最も是なり。然れども沾帯とは何事ぞ。陽明先生のいわゆる色利名根を出でず。もし無事なる時、一一搜剔浄尽し、赤蕩々地ならしめば、妄想何によって萌蘖せん。これまさに老先生今日の能事なり。某、功夫なお疏なり。　理欲雙び行なう。ただ勉めて策励し、至教に負くなからんことを期するのみ。」

（全書巻四十三、復念台先生）

つまりこの書簡によれば、念台は龍正の立場に、なお沾帯があると指摘しているわけであるが、それは、宋儒の「未発の気象を看る」の説と、陽明の「良知は即ち未発の中」の説とを、ともに未だ、「中和を離れずと雖も、実は中和に依らない」慎独の真義に徹しないものとする（劉子全書巻五、二十六丁）念台の眼に映じた高忠憲流の主静主義に対する不満をもらしたものであろう。龍正が、右書簡の末尾に、禅家の理障事障説まで引合いに出して釈明しているように、ここでは心の深層部にまつわりつく複雑微妙なかげりの処理が問題となっていたようであり、すでに人間観をやや異にする両者の間に、見解の不一致点が残されたのはやむを得ないにしても、龍正は終生かわらぬ敬意を念台にささげ尽していたのであった。[6]　龍正の崇禎十三年（と言えば両者が他界する五年前のことであるが）の書簡にもいう。

「当世の碩果、劉念台先生あり。今、祖台の宇下に属す。ただ賢のみ賢を知るなれば、必ず能く徳業相成ぜん。」

（全書巻四十六、与陳臥子紹興司理）

この両者には、明末動乱期において、朱子学的名教意識による民族の護持と、陽明学左派乃至は禅仏教の説く無善無悪説へのあくなき反撃という点において、重要な共通性が見られる。だから同年、念台の龍正あて書簡には、次のような激励の辞がのべられているのである。

「学問の進歩いかん。想うに下手（かしゅ）の人は、時時これ工夫なれば、もとより時時進歩の際あらん。この時艱、能く上は君心を格すや否や。中は士大夫の気習を転ずるや否や。下は生民を塗炭より拯うや否や。今日の種種は、自ら信

じ嚢を探りて出し、時に之を措かんのみ。世に読書人少く、僅かに老兄輩一二を留むるのみにて、多くは得られず。勉めて幸に自愛せよ。」（劉子全書巻十九、復陳幾亭）

二、龍正と忠憲

前章にのべたように、龍正は三十代にすでに高忠憲に面晤する機会をもったのであるが、より本格的に教えを乞うたのは、四十歳以降だというから（困学説参照）、忠憲の歿前二・三年の間に過ぎない。しかし龍正の思想を決定的に方向づけたものは、この会遇に外ならなかった。龍正は、宋代以来の学問の大勢を、次のように大観する。

「北宋の士大夫、節義篤行、相砥礪する者多きも、原本を見るもの罕なり。故に二程、微妙を指示し、重きを著察に帰せしは、躬行を軽んぜしにはあらざるなり。躬行は、言うを待たざるものあり。南宋におよび、程門の説、漸くその真を失い、且つ変じて象山・慈湖となる。ここに於て朱子、重きを践履に帰して、以てその弊を挽かざるを得ず。道は一なるのみ。教は則ち時に随う。本朝の良知の教は、また訓詁沈淪の後に興る。近世、ただ高子のみ能くその中を執りて、而も生生の旨は、某また自ら体貼してこれを得たり。」（全書巻五、二十八丁）[7]。

ここでは、明代に於て、陽明と忠憲とが別格に扱われていることに、注目せしめられよう。忠憲の陽明に対する批判の核心は、その著「陽明説弁」（高子遺書巻三）にほぼ尽されていようが、しかし時あってか、「姚江は天挺の豪傑なり。良知を妙悟し、泥文の蔽を一破す。その功甚だ偉なり」（同上、巻九、崇文会語序）「陽明先生、良知を提挈してよりこのかた、掃蕩廓清の功大なり」（同上、巻九、廬山書院商語序）と、陽明の功績を讃えざるを得なかったし、事実、陽明のその体認を取り込めばこそ、東林学派は朱子学に新生面を開き、広汎な影響力をもつことができたのである。従って右に引用した龍正の文も、忠憲のそうした考えをそのまま踏襲したものと言ってよい。この方向に一歩進めた業績として、龍正が陽明学顕彰のために編集したのが、『陽明要書』八巻である。この書編集の意図は、その序例に委しいが、次の一文もこれを吐露して余す所がない。[8]

「陽明要書すでに成る。伏して祈る、政を為すの優（いとま）、一たびこれを披簡せんことを。ひそかに惟うに孔孟以降、学者の心眼劃開し、聖賢と豪傑と、分ちて二色の人となし、問学と康済と、認めて二項の事となし、性命を談ずると作用

を述ぶると、視て二種の書となす。近代、一人の身を以て、豪傑にして聖賢なるものは、陽明先生、これなり。問学と康済を合して一事となすものは、陽明のなす所、これなり。講学と載事とを合して一書となすものは、陽明の書、これなり。弟、これを以て亟んで鋟みてこれを行なうは、その世を救うこと誠に切なるがためなり。世にかくのごとき人なし。もし人人かくのごとき書を見るを得ば、或いは感発して興起するものありて、賊平ぐべく、民安んずべきなり」（全書巻四十二、与朱勉斉）

聖賢と豪傑とを兼備した人物の出現を待望する龍正の心中には、もとより明末の危局を見事に処理すべき、スケールの大きい人傑への憧憬がある。世には陽明の思想と事功を分離し、事功は取るべきも、思想は全くの異端邪説とする向きもあるが、龍正は、陽明思想に全面的には同調できないとしても、そこに人心覚醒の威力あることを認め、特に抜本塞源論については、「尤もこれ宗を統べ源に匯むる処にして、実に千年以来、未だ開けざるの眼、宜しく潜心熟翫すべし」（全書巻五十四、六丁）と讃えているのである。それでは、それだけ陽明の人品学術を高く評価しながら、なぜそこに不満の意をもつのか。それは、良知説に付随する無善無悪論の弊害を目撃しているからである。由来、無善無悪論は、陽明門下左派の旗印となり、既成の道徳律打破に狂奔するものの合言葉となっていたのであるが、その淵源はもとより陽明その人にあり、朱子学の体質を保有する龍正としては、とうてい受けつけられなかったのである。『陽明要書』凡例にみえる次の一節は、朱子学に対して陽明学を弁護したものであるが、同時に龍正にとって望ましい陽明学のかたちが示されていると思われる。(9)

「今ここに人あり。人倫においては篤くし、世に用いらるるにおいては克く済すあり、人を知るにおいては爽わず。独り陽明の教を宗とすれば、遂に正学にあらずというべけんや。今ここに人あり。多欲以て五倫を薄んじ、実心以て世事を荷うことなく、虚衷以て君子小人に鑑みることなし。独り陽明を排して程朱の説を崇べば、遂に正士というべけんや。」

このように龍正は、陽明学の端正なかたちには共感を示すのであるが、東林学の全般的傾向がそうであるように、良知説の左傾化には、きびしい警戒の眼をゆるめない。

「陽明先生は、稟異なり学透る。然も力めて朱子を駁す。朱子は躬行心得、世を持し教を垂る。なんぞ駁すべけん

や。まま滞語あるも、末だ思孟に及ばずというは、則ち可なり。また豈に真に道に背いて馳するものあらんや。これよりのち、乃ち王龍谿畿のごときあり、羅近溪汝芳のごときあり、周海門汝登のごときあり。みな陽明を尊び、晦翁を卑しむ。畿はすでに念菴羅氏ら諸儒に斥けられしが、而も汝芳は楊起元（復所）これを奉ずること神のごとく然り。儒を混じて以て仏に入れ、陰かに仏に借りて以て儒を攻めて、百方晦翁を駁撃し、或いは程門の言に本づき、或いは亀山の語に傍り、情を恣にして敲剝し、一呵一罵するに至っては、ただ汝登最も甚だし。また陽明以来、未だ嘗てあらざるなり。その学を講ずるや、宰予の短喪の如きも、なお曲げて廻護を加う。大低人倫を軽んじて私慾を賛け、罪を聖門に得ること極めて多し。余、これを存して以て後学を禍するに忍びず。故に尽くこれを削りて、ほぼここに著す。」（全書巻五十四、諸儒語録）

明末における左派王学のかもし出す儒仏混融の風潮にも、さまざまな類型があり、羅近溪や周海門のねらいが、必ずしも人倫をやぶり私意を恣にする所にはなく、むしろ人間の自然的情念に訴えて、人倫形態の新しいよみがえりをはかったものであることは、すでに別の箇所で論証しておいたが、[10] それを右の如くとらえざるを得ない所に、龍正思想の限界と特色があったと見られよう。すでに近溪・海門にしてこれほど異端視されるとするなら、李卓吾の邪説横議が、毒根を散布し、国本を誤るものときめつけられるのは、当然のことである。[11] しかも龍正より眺める時、こうした虚誕無実な思想が流行する背景には、好んで作用を談ずる風潮、すなわち社会動向を先取りしているかのような顔をして、機変を弄し、変幻をたくましくし世態人情を根抵からゆり動かそうとする不逞な野望の跋扈があると受取られた。勿論、その実社会への烈々たる関心は多とすべきであろう。しかし、「馮道は大忠臣、卓文君は大慧婦」という李卓吾ばりの無軌道な議論に盲従する輩が続出し、無恥傲慢がまかり通る世相からは、社会秩序回復のための具体策は、何ら生まれて来ないであろう。（外書巻一、好言作用条参照）

「人苟くも専ら作用を重んずるの意を存すれば、その流弊、至らざる所なく、その鄙や、昏夜に行乞し、その狼や、白昼に人を殺す。」（全書巻十六、十七丁）

こうした悪質無責任な作用論には、最初から人倫を無視してかかり、懸空の悟りをふりまわす禅の影響があることは、まちがいない。

「大抵、禅学の浅きものは用なきも、これを用うれば、適に以て天下を毒す。深きものは用あり。然れどもその用は、大都覇に近くして王に近からず。曲げて顓蒙を誘い、驩虞を近づけ、機鋒犀利にして、捷取に近し。」（外書巻二、禅家作用近覇）

以上のように見て来る時、龍正は、一面に於て豪傑の出現を待望しつつ、他面では覇儒覇禅を排撃するという、一進一退の立場にあることが了解されよう。あれだけ露骨に作用主義に反対した龍正に、「節に中るは、ただ一室に黙然たるのみにあらず。須らく作用あるべし」（全書巻五、二丁）の語あるは、一寸意外であるかも分らないが、そこに時代の閉塞を意識しつつ、ある枠組の中を必死にもがきつつ進もうとする彼の苦闘を読みとるべきであろう。こうして龍正は、彼なりの視点から、陽明と忠憲の立場の相異を、次のように整理するのである。

世には忠憲の「心如太虚、本無生死」の語をたてに取って、陽明の「本無始終、寧有死生期」と同一視し、ともに禅病をまぬかれぬとするものがあるが、陽明学が、善悪をなみし、照妄を混じながら、人倫を尊び世界を保持するという点で、わずかに禅との相異を打出そうとするに対し、忠憲は、性善を宗とし、格物読書の研究を重んじ、経世には先ず善悪を分別することを本旨とするが故に、禅に堕する恐れがないどころか、禅の病疾をいやすことができるものである。（全書巻九、二十一丁）こうして龍正は、どんなに陽明学に親近感を抱くことがあったにせよ、究局に於ては忠憲に回帰せざるを得なかったのである。

ただ龍正が、忠憲に慊らぬ重要な一点があった。それは朋党についての考え方である。前章で見たように、東林党をめぐる血なまぐさい政争は、たとえその政治的意図が純正であったとしても、結果的には、セクショナリズムの抗争に終り、民生そのものの康済より遊離する恐れなしとしない。成程、忠憲は、「党類の党はなき能わず、これ群分の品なればなり。偏党の党はあるべからず。これ乱亡の本なればなり」（高子遺書巻七、論学揭）と、正義の同志の結合による党類と、偏見私慾にもとづく集団との質的相違を意識してはいる。しかし「大抵、衰世熱腸の人は、地として風波にあらざるはなし」（同上巻八下、与筠塘）という孤高を誇りとする正義感は、依然として自己を中心とした集団の力を、余りに過信するに至る懸念はないであろうか。中国の社会において、朋党の禍害をめぐる論議は長い。忠憲思想の忠実な祖述者を以て任ずる龍正ではあるが、やはりこの問題に関する限り、慎重論を唱えざるを得なかっ

た。

「或るひと東林を問う。その号は正し。（されどそれに）入ると入らざるとを以て、賢と不賢となすは、固なるかな。心の忠なるか忠ならざるか、器の洪いなるか洪いならざるか、才の通ずるか通ぜざるか、言と行との公なるか公ならざるかのみ。なんぞそれ東（林）と東（林）ならざるにあらん。」（全書巻三、十五丁、論世）

また言う。

「梁溪先生（忠憲）の学を論ずるは、至って精なり。まさに程朱の語録と同じく看るべし。その詩文もまた妙境多し。復七規・山居課程は、初学に開示すること、均しく大功あり。ただ朋党説の一篇のみは、なお激するありて発するに似たり。」（外書巻一、梁溪朋党説）[12]

東林党の悲惨な結末と、社会不安の増大は、龍正をして、さらに忠憲の立場を乗り越えて進ませることとなった。そこに生まれたのが、一種の生々の哲学であって、「而も生生の旨は、某また自ら体貼して之を得たり」（前引）と自負するのがそれである。[13] 然らばその生々の哲学とは、どのような内容をもち、どのような実践の企画をもつものであろうか。

三　龍正の思想

明末の思想家の座位を見定めるための、一つのきめ手は、彼がそれを理におくか、気におくか、心におくかを調べることである。上来述べて来たように、龍正は、「（理学の）二字は便ち千万世の宗主となす」（外書巻一、理学二字の条）と断ずるように、朱子学系の理学をふまえているのである。彼は羅整庵が、朱子学を手直しして気に重点をおいたことは知っていたが、それに同調追随しようとはしなかった。龍正の理気に対する考え方はこうである。

「気を認めて理となせば滞る。気を理より分てば支なり。ただ気に就いて理を認むとするは、羅整庵の説確かなり。然るに朱子の体認の精なるを以てして、終身理気を指して二となせるは、豈に草々ならんや。おもうに、気には舛錯あれども、理には舛錯なし。感応の際の如き、合するものは理なり。その或いは合せざるものは、理にあらざるなり。気なり。蓋し理の専らなるを尊びて、その失を気に帰するなり。」（全書、巻六、三十丁）

こうして理優先の伝統を守りぬこうとするが故に、「道理は平平常常、現現成成たり。ただ嗜慾意見に隔断せらる。ゆえに理会せず、体貼せざるなり」（同上、巻八、十八丁）と、理の存在がらくらくと認定され、それに目ざめぬ責任は、ことごとく主体の私意欲望に帰せられることとなるのである。従って、朱子学や東林学において、仏教にいう理障説など、あり得べからざる妄論だと退けられたように、龍正も、「理はもとより障なし。これを執ずれば、障あり。執を免れざる所以は、またただ理を見ること尽さざるがためなり」（同上、巻八、十九丁）と言うのである。

だから実践工夫についても、朱子学的格物論が、そのまま導入され、学は虚霊より直入すべきではなく、「必ず格物に始まり、然るのち心・理・知・行、合して一となる」（外書巻一、不格物之病の条）と断定される。(14)

ところで「家伝」によれば、龍正は、崇禎三年の元旦（四十六歳）雞鳴を聞き、胸中曠然として一事なきを悟ったという。高忠憲にも類似の経験があり、（困学記参照）これは朱子学者から、禅的とか陽明学的と非られるのであるが、龍正よりすれば、朱子も陽明と同じく大悟をもったと反論されるのである。（全書巻四、七丁）ここに龍正における朱王折衷の一形態を認めることができるわけであるが、龍正においては晩年の生生の哲学において、その意味が一層明確化して来る。それでは彼が生生の哲学を説くに至った直接の動機はどこにあるのか。崇禎十四年（五十七歳）の龍正の書簡にはいう。

「昨歳、使を中州に奉ぜしが、餓屍道に満つ。米毎升八分にして、而も巨室能く粟を発して饑を賑わし、上は君心を慰め、下は民志を固むるもの、所在寥寥たり。・・・・・ この時すらなお惻隠を動かさず。いかに況んや他時をや。既に人の死亡を救うの心なければ、また他の徳行と他の経済とを問うことなし。」（全書巻四十七、復蔡雲怡憲長）

またいう。

「数年来、民の饑斃するもの幾百万。兵の饑に因りて亡逃潰散するもの幾十万。 皆食なきに因る。豈に銀なきがためならん。ただ願わくは、挙世の精神議論、銀子二字を丟開せば、則ち財を生ずるの道理、おのずから見えん。」（同上、巻四十七、答楊抉曦戸垣）

こうした民生塗炭に苦しむ世相を目前にして、「天地之大徳曰生」という易経の語は、彼の重用する所となり、その生命尊重論から万物一体が説かれることとなる。そこにはもとより、陽明の抜本塞源論とか、高忠憲の「人身の内

外は皆天なり。一呼一吸、天と相灌輸す」（高子遺書巻一、十丁）という思想の影響があったであろうが、龍正の見聞する日々の事象は、彼を急速に迫切な生命尊重論者へと駆りたてずにはおかなかったのであろう。

「天地の大徳を生という。学はただこれ天地に生生息むなきの心を完うせんことを学ぶのみ。然らずんば、千悟万悟、千修万修、帰着する処なし。近古以来、高き者は聚講して道を明らかにし、浅き者は自ら好んで名を立てて、而も物交わり気動けば、未だ勝を好むの心を起して、物を損うの事をなすを免れず。ただこれこの主意をば、提することと分明を欠き、認むること堅定を欠けばのみ」（外書巻一、先明大主意）[15]

先にのべた彼の覚醒は、こうした迫切な事態を目睹しつつ、なお小我に閉じこもり、一家の安穏の上にあぐらをかこうとする身勝手な意識への反撥として生まれたものであろう。人間としてのみずみずしい感応力を失った鈍麻せる教学に、深い絶望を抱く所から、彼の新しい理の哲学が生まれたのである。こうした自覚のもとに彼は、崇禎初年より、朱子社倉法に模した同善会を同志とともに結成し、

「これを行なうこと八九載、毎載四たび挙し、貴賤上下、油油として心を同じうす。蓋しこの会を設けてより以来、ほとんど餓殍なく、道殣なし。又時時講解勧誘し、以て良心を提醒して、邪孽を消弭し、黙して郷約保甲の助となすべし。」（全書巻四十五、致喬聖任按台）

といわれるほどの成果をあげることができたのである。もっとも同善会は、すでに高忠憲が万暦四十二年、同名のものをその郷里に設立して、「鰥寡孤独の中の節孝あるものに贈らして、尤もこれに加恵した」（高子年譜）先例にならったものであって、『高子遺書』巻十二には、忠憲の「同善会講語」三条をのせるが、それは明太祖の六諭を中軸とし、郷村社会の淳風美俗を保存し、特に「一県中の老者・貧者・病者・死してよるべなき者」をば、家族同様に、惻怛の情を以て救い、持てるものの応分の寄捨によって、社会的緊張の緩和に役立てようとしたものである。龍正は、忠憲の「同善会講語」の後に書して、次のようにのべている。

「この会は、十分の妙処あり。費少くして、功多し。以て養いて教を兼ぬ。書院講学の名なくして、人と善をなすの実あり。ただに恵を受くる者の感激するのみならず。言を聞く者も感動す。もしこれ地方の官長も、いよいよ心を尽さざるを得ず、郷紳袍衿も、またいよいよその惻隠を提醒す。上上下下、合県善を学び、兵火大患の到来するあ

りと雖も、此の方の人は、或いは落劫を免るべし。」（全書巻二十四、二十三丁）

ここでは、同善会こそ書院の講学にまさる勧善宥和・官民連帯の機能をもつと強調していることに注目させられるのであるが、事実龍正は、この会の発展に心血を注いだもののごとく、当初（崇禎五年）の会員は、忠憲の場合と同様数十人より発足したようであるが、約十年後には三四百人にふくれ上っている。[16]（全書巻二十四、十五丁）流寇各地に発生し、難民饑民山野に溢れる危局においても、「貧富貴賤合して一心となれば、大戸は銭財を重んぜず、小民は尽く忠愛を懐き、太平の時には、便ち太平の時の随常の善悪あり、患難の時には、又患難の時の推広の善事あれば、まさにまた何をか憂うべき」（全書巻二十四、十五丁）というほどの期待を、同善会の運営にかけていたのであった。崇禎十七年、李自成の京師入城のため、毅宗帝が自殺するという「天翻り地覆る」時期に立至っても、龍正はなお「各安生理、毋作非為」という六諭の言を奉じ、直ちに発心着手して善端の拡充につとめるのが、本来生生の理に合する活路だと叫んでいたのである。（同上、二十二丁）国家の統一体制が崩潰し、郷村秩序の維持が自衛的手段に頼る以外になければこそ、同善会のねらいは適切無比だと龍正は考えていたようであるが、浮き足だった時人の全動向に、どれだけの効果をもち得たであろうか。

理学の枠を越えて、歴史を達観する眼を欠如する龍正は、いわばエゴの克服・抑止によって、世相の険悪を漸次鎮静できると考えていたわけであるが、時潮は遙かに複雑な規模と力をもって急速に流動しつつあったのである。劉念台から「沾滞あり」と指摘されたのも、このあたりに理由があったのかも分らない。

自己の思想を一度突き放し、時局との対応関係を考慮しつつ、根本から再検討する試みは、龍正のとうてい思い及ばぬ所であった。彼はいう。

「智者は安静を務め、愚者は更張を喜ぶ。その智を矜らず、故に敢て軽がるしく前人を変えず。その愚を知らず、事事翹然として奇を見（しめ）さんと欲するなり。智者はやむを得ずして、而るのち動く。その動くに及んでは、又無事なる所を行なう。愚者はそのやむべきに於て、みなこれを紛更す。その動くに及んでは、功なくして害衆し。」（全書巻二、十一丁）

だがこの愚者の道を歩む勇気をもつことこそ、緊要な課題ではなかったろうか。

四　仏教観

明末における仏教の復興は、士人層をもその渦中にまき込み、さまざまな儒仏一致論者が出現するに至るのであるが、東林学は概して、この傾向に批判的であった。それは忠憲の言葉を借りれば、「それ禅の敝、一言にこれを蔽えば、曰く、理なきなり。そのいわゆる理は、吾がいわゆる理にはあらざるなり」（高子遺書、巻九、瞿元立先生集序）ということになるであろうが、龍正の排仏論をつきつめれば、こうした所に帰着するにしても、『幾亭外書』巻二に見られるように、集中的多角的にその論旨を展開していることに、一応注目すべきであろう。彼をここまで熱烈な排仏論者にかりたてた第一の理由として考えられるのは、儒仏一致論のすばらしい流行に対する儒者としての危機感であろう。

「（胡）敬斉、往往仏を斥けて愚となすも、仏は天竺に在りては、乃ち大智慧の人にして、愚にはあらざるなり。我が中華の人士の周孔を習びて釈迦を心とし、高き者は無主の霊心を挾み、卑き者は無用の奇跡に驚くは、則ち誠に愚なるのみ。」（外書巻二、仏家神通妙用）

「毎に、士大夫の孔孟を卑んで六経を薄んずるを見るも、未だ僧家の仏祖を非り菩薩を笑うを見ず。これ士大夫の智、反って僧に如かざるなり。」（外書巻二、士不如僧）

こういう逆立ちした思想界の実状に、龍正は歯ぎしりするのである。龍正が仏教をきびしく指弾する第二の理由は、仏教教団が、無為徒食の輩の逃避所となっているという、社会風教上の視点によるものである。彼は一例を杭州天竺寺に求め、「香火甚だ盛んなるも寺僧殺生酗酒せざるなく、寺の外は屠家甚だ多き」（全書巻二十九、十八丁）ことを指摘しているし、また江南地方における流賊まがいの現象として、衣食にあぶれた数十万の行脚僧なるものが横行し、到るところ遊方掛搭し、而も山川の形勢にくわしく、各地方の虚実を識り、大戸の名姓を憶え、遊民徒党同然の渡り鳥生活をしていることを概嘆している。（全書巻三十二、与沈君儒少参）こうなれば、「叢林いよいよ盛んなれば、民生いよいよ貧し」（外書巻二、叢林害民）と言わざるを得ない。

以上のような龍正の仏教批判を通観して、すぐに気づくことは、なぜこれほどまでに仏教が流行し、社会の各層に浸透したかということへの洞察が欠如していることである。忠憲が、「吾が儒は窮理を最も先となす。理・心空に徹

するも禅に入らず」（高子遺書巻六、戊午吟其八）とうたい、龍正自身も、「聖は以て禅を該ぬるに足るも、禅はこれ聖学中一点の微機のみ」（全書巻二十、八丁）と言わざるを得ない、儒と禅との毫忽の相異について、深い解明がなされているとは見なしがたい。ましてそこに流行しているものが、依然として禅と呼ばれる特定宗教に止まるのか、或いは仏教の枠を脱した心の原点を指向する普遍的体験であるのか、と問いつめてみる視点は、全く欠落していた。つまり彼が「聖学中一点の微機のみ」と過少評価したものが、実は時流を動かす最も根源的なものにかかわっていたかも分らないということを反省するには、彼は余りにも根強く朱子学的理意識のとりことなっていた。そのために彼は儒を護らんとして、かえって人間を取りそこなったのではあるまいか。だから彼の次の言葉が、どれだけ時人の共鳴を得たか疑わしいのである。

「もしそれ聖修と禅覚とは、発源はるかに殊なり、用功はるかに絶す。彼によりて以て此に通ぜんと欲するも、既に得ず。即ち彼を執りて以て此に当つるも、また得ず。径ちに人倫の日用に於て、実に察し実に行わば、忠孝到頭の処にして、朝聞夕可具足せり。」（全書巻四十六、答朱勉斉）

これほど仏教ぎらいの龍正が、雲棲袾宏の「戒殺文」にだけは共感を示し、「深く儒理を助く」（全書巻二十二、二十一丁）と言っているのは、彼の生々の哲学と協和するからであろうが、而も仏教の慈悲を評して、「自然の条理を失す。故に意は広しと雖も、道は多く窮するのみ」（外書巻二、遠庖厨の条）という所に、その基本的態度が微動だにしていないことを読みとれるのである。かつて、明代思想史の先駆者といわれる陳白沙は、一朱子学篤信者に対し、「全べて放下するにあらざれば、終に湊泊し難し」の語を酬いたが（白沙集巻三、与羅一峰）龍正にとって、この応酬は、恐らく十分に理解しがたいものであったであろう。さればこそ龍正は、白沙を目して、「細かくその旨を考うるに、果して禅なること疑いなし」（全書巻五十四、皇明儒統凡例）と判定してはばからなかったのである。[17] 同じく主静を標榜するとは言え、両者の間には明らかに異質のものがあったのである。龍正には、明代心学思潮発生の因由と初心を、正確に見通す視点が欠如していたのであり、それが結局彼の思想と実践を、一定の規格の中に踏みとどまらせる結果になったのである。

註釈

(1) 龍正の生涯に関する叙述は、主として陳幾亭全書巻六十三、陳祠部公家伝による。なお本稿では、崇禎四年自序の冠せられた陳幾亭全書及び幾亭外書を使用したが、以下全書・外書と略称することとする。

(2) ただし高忠憲と呉志遠とは、すでに万暦二十二年頃から交際があった。忠憲の「困学記」参照。

(3) 忠憲における静坐が、決して社会的活動を阻むものでなかったことについては、彭南畇も釈明している。「姚江釈毀録」参照。

(4) これについては幾亭外書巻二、五十一丁、無事可為之害の条参照。ここで龍正は、単なる無事閑暇は大不祥の機括とのべている。

(5) 丁賓の伝は、明史巻二百二十一に出づ。

(6) 幾亭全書巻五十、致劉念台先生参照。

(7) 龍正の「高子遺書序」参照

(8) 金書巻四十一与朱荆陽工部及び巻四十二復朱蔚園参照

(9) 朱子学者陸稼書が、「愚思うに、王氏（陽明）と高弟との、語言流伝するものは、宜しく陽明要書の例にならい、摘みてこれを弁ずべし。後世をして再び惑わざらしむるに庶からん」（三魚堂文集 言巻七）というのは『陽明要書』の編集態度に、朱学による王学制御の実質ありと読みとったからであろう。これに対し、朱王折衷論者である彭南畇が、「陳幾亭先生に陽明要書あり。分類やや妥にして、推崇特に至れり。まま紕繩の処あるも、なお多事なるを覚ゆ」（南畇文稿巻十一、与王草堂書）と、基本的には賛意を表しながら、多少不満の意をもらすのは、同一事態を逆に受けとめ、王学閉塞への危惧を示すものであろう。

(10) 拙著『明代思想研究』参照

(11) 李卓吾批判については、全書巻十九、十六丁及び外書巻九、二十丁参照。

(12) 龍正はまたこうもいう。「群して党せずとは、孔聖の明訓なり。（論語衛霊公篇の語）群する者は、汎く愛して仁に親しむ。党する者は同を喜んで異を悪む。心に公私あれば、迹また弁じ易し。たとえ百人を以て率と

となすも、親しむ所の者仁なれば、一二に過ぎざるのみ。党は豈にかくの如く少なからんや。」（全書巻五十三、群党解）

また朱子の与留丞相書は至当でないとのべているが、（全書巻四十一、復銭宗伯）これは朱子文集巻二十八に収められた十月十二日附書簡をさすものと思われ、この中の君子小人論が朋党の争を誘発する恐れありと考えたからであろう。

（13）黄宗義もまた「師門（忠憲）の旨また一転せり」という。（明儒学案、東林学案四、陳龍正の条）

（14）またこうも言う。「理義に明らかなるものは、その心の安と不安と拠るべし。理義に明らかならざるものは、その心の安と不安とは、拠るに足らず。或いは浮にして専ら世情を顧み、或いは僻にして物情を顧みず。浮なれば、人に順うを喜び、人に払るを戚う。これ世情を認めて本心となすなり。僻なれば、径ちに己意を行い、害を貽すを惜まず。これ本心を認めて物情の外に在りとするなり。世情には、宜しく顧みるべきあり、宜しく顧みるべからざるあり。格物にあらずんば、何によりてその宜しきと宜しからざるとを分たん。物格にあらずんば、何によって本心をして自得せしめん。」（外書巻一、窮理方能見本心の条）

（15）また言う、「正に一相も立たざる処において、万物一体の端倪を体認し出さんと欲するのみ。若し人我隔絶すれば、その高きを養い静を習うこと、反って隠隠として一段の殺機を養成す。」（外書巻一、以生字明宗の条）

（16）同善会運営の細かい規定は、全書巻二十三の同善会規約に見え、会講の内容については、巻二十四の同善会講語にくわしい。

（17）龍正はまた、欧陽修・陸象山・陳白沙の三名は、文廟に従祀すべからずとしている。（全書巻五十一、文廟従祀議）

〔附記〕本稿は三島海雲記念財団より受けた奨励金にもとづく研究成果の一部である。